【2022 年度第 1 回研究会発表要旨】

アイヌ語における上位起算法の再考
―17 世紀の記録「蝦夷国報告書」に照らして―

落 合　いずみ

アイヌ語は 20 進法であり基底数は 20 の倍数であるが、基底数の間の数において前半は下位起算法、後半は上位起算法を用いると、落合（2021）は 20 世紀の資料に基づいて主張した。ところが Angelis（1624）により松前において 17 世紀に記録されたアイヌ語数詞では上位起算法への切替えが見られず、専ら下位起算法である。元々下位起算法のみであったが、後に上位起算法も用いるようになったとも考えられそうだが、この変化の方向は通言語的にみても例がない。通常は上位起算法を失い下位起算法に変化する。そのためアンジェリスの記録した数詞は早々に上位起算法を失ったと考えられるが、その理由を和人との接触が濃密であった松前という土地の特殊性に求めることができるのではないか。日本語には上位起算法が無い。和人との交渉を円滑にするために、上位起算法を失った一種のリンガフランカ的なアイヌ語の数詞が松前で用いられていたのだろう。

引用文献

Angelis G. de.
1624 *Relatione del Regno di Iezo* [An account of the land of Iezo]. In *Relatione di alcune cose cauate dalle lettere scritte ne gli anni 1619, 1620 & 1621 dal Giappone*, l'Erede di Bartolomeo Zannetti, Roma.

落合いずみ
2021 「アイヌ語の数詞再考：二十進法における下方算法から上方算法への切り替え」『北方言語研究』11: 99-121.

（おちあい・いずみ／帯広畜産大学）

移動する狩猟者と動物の身体
―北海道斜里町の狩猟実践を事例に―

加 賀 田　直 子

1. はじめに

狩猟において「移動」は、動物と出会い、殺す、という場面に至るまでの重要な過程である。現代の狩猟では、移動は自動車や徒歩などの手段によって行われる。本報告では、狩猟において移動する際に狩猟者と動物の身体がどのような関係にあるのか、人類学者ティム・インゴルドの移動に関する議論と、「アフェクト（情動）」を鍵とした身体の議論を参照しながら北海道斜里町における狩猟実践の事例を検討する。

2. 移動と身体

人類学者ティム・インゴルドは移動に関して「徒歩旅行」と「輸送」という二つの様相を提案した。インゴルドによると、徒歩旅行とは移動と知覚が親密につながっている状態であり、すべてのいきものが地球に居住するための最も基本的な様式、動きそのものである。一方で「輸送」とは、ある位置から別の位置へ横断して人や物資をその基本的な性質が変化することのないように運搬することを意味する。輸送は、徒歩旅行にみられる移動と知覚の親密なつながりの消失によって区別される（インゴルド 2014:127-129）。この移動と知覚の基盤となる身体について、本報告では、「アフェクト（情動）」という概念をめぐる議論を参照する。「アフェクト（情動）」とはスピノザの「アフェクトゥス」に端を発す概念であり、人間やものなどを含む様々な存在が身体を基盤に相互に作用・影響しあう様態を表す。哲学者ジル・ドゥルーズと精神分析家のフェリックス・ガタリは、相互に作用・影響しあうことの強度は内側からも外側からも到来し、個体が行動を起こす能力を増大させたり減少させたりするとした（ドゥルーズ・ガタリ 2010: 198-199）。これを彼らは「生成変化」とよび、身体のあり方をアフェクトの総体として規定する。報告者は本報告において以上のような視座から身体を周囲の環境と相互に影響を及ぼしあう動的なものとして捉え、北海道斜里町に在住の狩猟者たちの事例を検討する。

3. 現代の狩猟　―斜里町の事例

調査を行った斜里町は人口 1 万人ほどの町であり、オホーツク海に面した知床半島の基部に位置する。報告者は斜里町で狩猟を行う人々の狩猟に同行させていただくという形で 2020 年 6 月から 2021 年 3 月、2021 年 8 月から 9 月にかけてフィールドワークを行った。獲物は有害駆除においては、農地の作物を荒らすエゾシカ、ヒグマであり、狩猟期は狩猟が許される可猟区、主に山林で行われ、エゾシカ、ヒグマ、鴨などが主な獲物である。狩猟の方法は銃猟がほとんどを占め、同行させていただいた狩猟は全て銃猟である。調査対象である斜里町で狩猟を行う人々は 20 代から 70 代までの老若男女である。フィールドワークでは主に 70 代の地元出身ベテラン男性狩猟者 S 氏と、移住して狩猟をはじめ数年の 20～30 代の夫婦である K 氏 M 氏の狩猟実践に同行した。

現在斜里町で狩猟を行う人々の多くは移動に自動車を使用する。山林まで自動車で移動し、そのまま山林の中まで進む場合もあれば、徒歩や、積雪時はスキーやかんじきを使用する場合もある。70代のS氏は車で林道や農道を徐行しながら動物を探す。一方で20〜30代の狩猟者であるK氏とM氏は身体感覚として土地や動物を理解することを重視し、徒歩で移動を行う。動物に出会う可能性は低くとも、動物の足跡や痕跡をたどり、道なき道を進んでいく。一方S氏は4月から9月まで毎朝晩に農地の見回りに出かける。広大な農地を朝晩2〜4時間ほどずつ周り、自動車を運転しながら農地の様子や動物がいないかどう注意を払う。動物の動きを把握するためには毎日見に行かなければならず、動物側も人間の自動車の音や排気の匂いを知覚し記憶することで畑に出てこなくなるという。移動において動物や人間が知覚するのは、視覚的な姿そのものというよりはむしろ足跡や糞、匂いなどの痕跡である。また狩猟の際に知覚される音は動きそのものとして知覚される。動物の足音、木々の揺れる音、耳が傾く音は動きそのものである。そして移動の際には「待つ」行為も行われる。狩猟者たちは直近で被害の多い農地や、山林で待つ。時には鹿のラッティングコールを模した鹿笛を使用する。身体の位置を固定させ知覚する世界は、身体の位置を動かしながら知覚する世界とは異なるものである。

4. 狩猟において移動する身体

狩猟における移動の目的は動物と出会うことであり、動物の身体を探し、追いかける狩猟者たちは常に周囲の世界に注意深く、変化に敏感にあらねばならない。狩猟において移動は決められた一つの地点を目指す移動とは異なる。インゴルドの提唱する二つの移動の様相に照らし合わせると、狩猟における移動はその手段に関係なく徒歩旅行的であるといえる。一方で、そこには車という機械的手段と徒歩という身体的移動手段の差異が存在する。これはどちらかに優劣をつける議論ではない。自動車という仕切られた空間と身体で直接的に知覚されることの多い徒歩という移動では、そこで生じるアフェクト（情動）の差異があるのではないだろうか。

また狩猟実践において移動とは動物に出会うというその瞬間を「待つ」、動物という生きる身体に出会うための働きかけであると考えられる。一見受動的に思われる身体を動かさずに待つという行為も、その働きかけのひとつである。そこでのやり取りは必ずしも動物を捕獲するという結果につながるとはいえず、動物も人間も生きる身体としてそこに存在し、その姿を知覚しながら駆け引きが行われている。斜里町で狩猟を行う人々の猟場は、彼らの生活の地続きの場所である農地や山林である。一度きりではなく長期的に、日常的に移動するなかで、斜里町で狩猟を行う人々独自のアフェクト（情動）が形成されていると考えられる。

引用文献

インゴルド・ティム
2014　工藤晋（訳）『ラインズ 線の文化史』左右社、東京.
ドゥルーズ・ジル、ガタリ・フェリックス
2010　宇野邦一ほか（訳）『千のプラトー―資本主義と分裂症』河出書房新社、東京.

（かがた・なおこ／北海道大学大学院文学院）

日本のドラァグ・クイーンにおける身体とパフォーマンス
―札幌市の事例を中心に―

呉　納 馨

1. 問題意識

ドラァグ・クイーンとは、本来、過剰な女装と派手なメイクを身に纏い、グラブやバーなどの場所を中心にパフォーマンスあるいはショーをするゲイやトランスジェンダーのことである。ドラァグ・クイーン文化においては、クイーンたちが自らの身体やパフォーマンスを積極的に利用して、必ずしも意図的ではなく伝統的な性別構造を問いただしたり転覆したりしている（バトラー 1999）。それが、日本に流入してからは、日本社会の文脈と結びついて変容が生まれたように見える。それならば、日本のドラァグ・クイーン文化では、かれらが自分の身体をいかに認識して運用しているのか、舞台上と日常生活でのパフォーマンスがいかに相互に影響し合った上で行われているのか、かれらの身体とパフォーマンスによってどのような意味が伝達されるのか、日本の文脈に依存した身体性、性別規範や社会構造はどのようなもので、それがどのように含まれているのかといった疑問が生じる。

2. 先行研究

まず、構築主義的なアプローチをすれば、身体は周囲の世界によって形作られている。また、ユクスキュルの「環世界」理論によれば、知覚世界（主体が知覚するものすべて）と作用世界（主体が作用するものすべて）が連れだって環世界という一つの完結した全体を作りあげているという。つまり、身体とその周囲の世界との関係は双方向である。ドラァグ・クイーンのそれぞれのライフコース、生活形態、居場所はかれらのパフォーマンスやドラァグ的な行為・身体に影響を与えていると思われる一方で、大袈裟な変装によって、かれらの日常生活にも常にクイーンとしての面影があり、かれらの日常的な身体にも「転覆」や「脱臼」な特徴が見られる。なお、このような身体が依存している周囲の世界は、生物学的な側面以外も社会学的な側面からも読み取れる。すなわち、「身体として生きざるをえない人間がある場所、人、モノとの係わり合いの中で活動する場」に展開している、「異質な関係性や志向や行為の重層性・変容の過程を捉える」日常的実践の場という（西井 2006: 2）社会空間において、かれらのそれぞれの身体は依存している環境のなかで相互に影響し合ったり、外部によって何かの撼動、受け入れた運動、つまりアフェクト（西井・箭内 2020）が触発されたりしている。

次に、「憑依」の角度からかれらの身体的感覚、経験を解釈できないだろうか。これまでの先行研究はほとんど、「ドラァグ・クイーンの身体は能動的である」という暗黙の前提を持つが、「クイーンになる」ときは「別人になる・変身する」という「憑依」感覚をもつクイーンは多い。このような「憑依」について、従来の憑依研究の焦点である「現に行為する身体と、その主体の一致、不一致、二重性をいかに解釈するか、またその身体経験がいかなるものであるかということ」に着目しながら、「憑依現象を憑依する身体とし

ての人のみではなく、そのまわりのモノの配置や共有された観念などの絡まりによって生み出される出来事」（西井 2013: 44）という「アフェクト論」と「社会空間論」の概念を援用することも可能と考えられる。そして、ドラァグ・クイーンのパフォーマンスを憑依として捉えると、身体と環境（社会空間・環世界）およびその中のアフェクトについて新しい視点が明らかにされよう。

3. 研究目的と意義

そこで、日本のドラァグ・クイーンの現状と関連する論考を軽く触れた上で、身体論、環世界、憑依観、アフェクト論の視座でドラァグ・クイーンたちの身体とその周囲の世界との関係、パフォーマンス現場でのあらゆる関係性及びかれらの身体における「憑依」という「生成変化」の実態についての空白を埋める可能性を検討する。その上で、かれらの身体とパフォーマンにある性別規範や社会構造を明らかにする。

4. フィールドワークと考察

上記の目的を達成するため、札幌にいるドラァグ・クイーンの生活に参与しながらフィールドワークを行っている。現時点（2022 年 6 月 12 日）までの考察結果として、以下の二点が明らかにされた。まず、ドラァグ・クイーンの身体だけでなく、かれらの依存している環境にも、「男性的なもの」と「女性的なもの」が混在しており、男女の境界は曖昧である。このような「混乱」は返ってかれらの身体に作用して形作っていく。そして、服装やメインという仕掛けと、かれらの活動場所という「環世界」が共同にかれらの身体に「憑依感覚」をもたらして変化を起こす。また、ドラァグ・クイーンと現場にいる人との物理的な距離が近くなることで、コミュニケーションを取りやすい。このような密閉な社会空間において、クイーンたちとまわりにおける人々の間には何らかの「アフェクト」が存在していると考えられる。

引用文献

西井涼子
2006 「社会空間の人類学―マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子・田辺繁治（編）『社会空間の人類学―マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社、京都.
2013 『情動のエスノグラフィ―南タイの村で感じる・つながる・生きる』京都大学学術出版会、京都.
西井涼子、箭内匡（編）
2020 『アフェクトゥス（情動）―生の外側に触れる』京都大学学術出版会、京都.
バトラー・ジュディス
1999 竹村和子（訳）『ジェンダー・トラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、東京.
ユクスキュル・クリサート
2005 日高敏隆、羽田節子（訳）『生物から見た世界』岩波文庫、東京.

（ご・のうけい／北海道大学文学院人文学専攻文化人類学研究室）

エスニックツーリズムにおける地元民と外来者との付き合い

冼　麗 珊

エスニックツーリズムによる伝統文化の破壊がよく議論されること対して、「伝統文化」の存在に疑問を抱いて、文化の動態的性質を強調する研究が増えている。ところで、観光活動の展開や地元民と外来者との付き合いの深化に伴い、文化の維持は研究者のスローガンに留まっておらず、実質の利益につながり、地元民の自文化を見直すきっかけとなる。一方、外来者に短期滞在の観光客　以外に、商売などの理由で長期間の滞在をする長期滞在余所者たちもますます見逃していけない存在となっている。その長期滞在余所者は地元民と雇用関係、仲間関係、競争関係など複雑な関係にありながら、観光客から見て、長期滞在余所者は地域に詳しい「半地元者」であり、どちらにも「他者」とされる。

（せん・れいさん／北海道大学大学院文学院）

【2022 年度第 2 回研究会発表要旨】

社会人にとってのフィールドワーク経験の意味
―仕事と週末環境ボランティアの往還から―

元 広　修 爾

1. はじめに

本報告では、社会人（自治体職員）の一人として、職場の問題解決を図るため、仕事と週末環境ボランティアをフィールドワークにより往還した経験を報告し、その意味を論じる。報告者の日々の仕事の問題は、環境教育の官民協働がうまくいかないことである。そこで、職場の仕事の原則を見つめ直したいと考え、本調査に取り組んだ。

2. 調査概要

従来の官僚制論では、官／民「セクター」の区別や、行政職員／市民の「役割」の区別が条件とされてきた。本調査では、視点を変えて、官民の「あいだ」（相互過程）に着目する。官の現場、民の現場をフィールドワークで往還し、そのただ中で、日々の仕事を官からも民からも見つめ直したとき、見慣れた仕事の前提や行政概念、もののやり方はどのように変容し、仕事にどのような変化を生み出すだろうか。

ここで、フィールドワークとは、応答の人類学（清水 2014）を参照し、公共現場で他者に応答しながら問題解決を図る人類学的実践と定義する。

調査対象は、出来事である。出来事は、官民の現場のあいだで日常的な公務に何らかの衝撃を与え、自分（私）の対処を引き起こすような事柄と定義する。

3. 民の現場、霧ヶ谷湿原での出来事と「現場」

小型サンショウウオ観察会は、2022 年 4 月 29 日に NPO 法人西中国山地自然史研究会により西中国山地・霧ヶ谷湿原において開催された。霧ヶ谷湿原では、2002 年から行政、同会、環境ボランティアにより湿原再生事業が続けられている。報告者は環境ボランティアの一人として、湿原の中で小型サンショウウオの卵塊を探すモニタリング調査に参加した。

調査当日、強い雨と風に浸されていると、湿原の連関と広がりが感じられ、自分の本当のサイズを知り、深い思いに至るという経験をした。この出来事を通して、私は湧水の流れや、植物が堆積した長い年月、保全活動の歴史、躍動する小さな幼生などに出会うことで、おのずから湿原の生の動き、空間的・時間的広がりの一部になっていた。一方、執務室の自分を思うと、これらの経験に抗するような意識的な自分がいる。相反する二つの思いから、ふと、現場の湿原の「内と外」の両感覚が得られた。その時、仕事の原則「現場主義」により「現場」感覚を発揮してきたはずであるが、実は不十分なのではないかという問いが生まれた。同時に、遠く離れた執務室から現場をパノラマ（ラトゥール 2019）のように眺めていることに気付き、現場（自然）の見方についてジレンマを感じた。

4. 官の現場、自治体執務室での出来事と「県民」

執務室と現場の距離を縮めたいと考えていたある日、執務室で出来事が起きた。私と西中国山地自然史研究会のKさんは、電話で研修準備のやりとりをしていた。役所の私は無意識に委託者の立場となり、「受講者募集を始めてください」と指示めいた話し方をしてしまった。一方、K さんは「一緒にやりましょうよ、あんな人、こんな人が応募してくれたよ！という感じで」と明るく提案をされた。K さんの「あんな人、こんな人」という言葉はとても印象的だった。同時に、自分の指示めいた話し方に違和感と疑問を抱いた。

人類学では、一人一人の人柄や行動は、比較不可能で代替不可能な「複雑性」をもって現れるとされている。（小田 2009）ふと、K さんの新聞投稿を思い出した。実践者の名刺は複数の所属先を「／」の数で示しており、その数は固有の技能、価値観、視点の多様さを表しているという。私は K さん自身の「／」の重みを実感し、そこから仕事の原則「県民起点」により「県民」理解を大切にしてきたが、実は不十分なのではないかという問いが生まれた。同時に、K さんや研修受講者を代替可能な存在として捉え、自分自身も委託者の役割に限定していることに気付き、人の「複雑性」についてジレンマを感じた。

また、指示めいた話し方について、ふと、加藤哲夫さんが指摘している「市民の言葉」と「役所のシステム言葉」の違いを思い出した。同時に、替わりのきかないKさんの言葉と、替わりがきく役所の私の言葉の間で普段の仕事言葉を揺さぶられ、ジレンマを感じた。

5. 日々の仕事の変化

こうした出来事が重なってゆくと、私は、役所の固定的役割にこだわらないで、自分の言葉で顧客や職場にかかわろうと考えるようになった。そこで、役所風の「断る」言葉遣いを減らした。官民の現場の実情を翻訳して双方に届けた。その結果、顧客からの感謝の声が増え、職場関係者との相互理解も深まった。図らずも問題がほぐれる経験となった。

6. おわりに

今回の調査では、現場の問いとジレンマに出会い、仕事の原則を揺さぶられ、現場の自然・人の見方が変わった。その結果、自己と他者のかかわりが変化し、仕事にも変化が生まれた。社会人のフィールドワークは、現場を内側から経験することを通して、職業生活を充実させつつ、応答の人類学の「応答」の具体化に貢献してゆく可能性を秘めている。

引用文献

小田亮
2009 「真正性の水準について」『思想』1016: 297-316.
清水展
2014 「応答する人類学」山下晋司（編）『公共人類学』東京大学出版会、東京、19-36.
インゴルド・ティム
2020 奥野克巳・宮崎幸子（訳）『人類学とは何か』亜紀書房、東京.
ラトゥール・ブリュノ
2019 伊藤嘉高（訳）『社会的なものを組みなおす　アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局、東京.

（もとひろ・しゅうじ／北海道大学大学院文学院）

類型論から見たアイヌ語の継続と完了形式の意味機能*

馬　長城

アイヌ語の助動詞および助動詞的連語「a（た）」、「kor an（ている）」、「wa an（ている）」のそれぞれの意味機能について、すでに数多くの記述がある。助動詞「a」は「perfect」あるいは「perfective」を表わす（佐藤 2007、吉川 2020）。「kor an（ている）」は動作の継続、習慣、変化の途中を表わし、「wa an」は結果状態の継続を表わす（佐藤 2008）。しかし、筆者の取集したデータの中には、「kor an」と「a」、「wa an」と「a」が共起する例が数多くあることが見出された。管見の限り、「kor an a」と「wa an a」は二つの形式の融合がどのような意味を表わしているのかという点についての論考は見られない。

本研究は中国語の視点からこの共起問題を提起した。英語や日本語の文法における相の研究成果を参考にし、アイヌ語の継続形式と完了形式が融合した形式「kor an a」と「wa an a」が共起する際の意味機能および、そのバリエーションに関して検討した。アイヌ語のいずれの方言においても、現在、話者数は少なく、実地調査は極めて困難である。そこで、本稿では実地調査を行う代わりに、これまでに公開されているアイヌ語の沙流方言および千歳方言の言語資料を研究データとした。なお、アイヌ語のデータは韻文物語と散文物語に分けられているが、本発表は散文物語のうち、日常語で語られる uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）、ukoysoytak（会話）の三種類を基礎データとして使用することにした。

また、本発表においては、Comrie（1976）における「perfect」と「perfective」の通言語的な定義に従い、それぞれを日本語の「完了」と「完結」という用語に対応させた。アスペクト的な意味における動詞の分類は工藤（1995）を参考にし、基本的に中川（1981）と佐藤（2006）に従った。なお、「kor an」、「wa an」はすべての動詞に使えるわけではない。本発表はその使える、使えない動詞の種類を吉川（2019）に従ったうえで、主体動作動詞、主体変化動詞、客体変化動詞、状態性動詞を中心に意味の記述を行った。その結果、次の結論が得られた。「kor an a」は主体動作動詞と共起する時、下記の四つの意味のバリエーションがあった。

1. 動作継続が発話まで続き、発話以後も続く可能性がある。
2. 文脈条件によって最近の活動として認識されることがある。
3. 一つ一つの時間幅のある継続動作からなる習慣として捉えられることがある。
4. 点として捉えられている動作継続からなる習慣を表わすことがある。

また、「kor an a」は主体変化動詞および客体変化動詞と共起する場合、限界のある過程として捉えられることがある。

一方、「wa an a」は状態性動詞、主体変化動詞、客体変化動詞と三種類の動詞と一緒に使われていた。

5. 状態性動詞＋「wa an a」の場合：その状態が発話時点まで続いていることを表わす。
6. 主体変化動詞＋「wa an a」の場合：漠然とした現在影響で最近の状態を表わす。
7. 客体変化動詞＋「wa an a」の場合：その変化の結果継続が発話現在において鮮明に残っていることを表わす。

特に、6 は佐藤（2007）がいう「a」の「知覚不可能」と一致していた。これは「wa an a」と「a」は文脈によって同じ意味を表わす可能性があることを示唆している。本発表は紙面の関係で、この意味中和現象に関する議論は今後の課題としたい。また、本発表は、継続形式を「kor an」と「wa an」に限定して「a」と共起する場合の意味機能およびそのバリエーションについて指摘した。しかし、アイヌ語における継続と見なす形式「kane an」と「a」が共起する場合の意味機能については議論しなかった。この点についても今後の課題としたい。

謝辞：
本研究は日本学術振興会科学研究費（研究活動スタート支援、課題名「中国語から見たアイヌ語のアスペクト形式の意味機能」、課題番号：22K19983、研究代表者：馬長城）の助成を受けた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

注：
*本発表は馬（2022）の一部から加筆修正を行ったものである。

引用文献

Comrie B.
1976 *Aspect*. Cambridge University Press, Cambridge.
工藤真由美
1995 『アスペクト・テンス体系とテクスト』くろしお出版、東京.
馬長城
2022 「日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現」博士論文、北海道大学.
中川裕
1981 「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習』81: 131-141.
佐藤知己
2006 「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12: 43-67.
2007 「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて—特に完了を表わす形式をめぐって—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13: 1-14.
2008 『アイヌ語文法の基礎』大学書林、東京.
吉川佳見
2019 「アイヌ語の存在型アスペクト「kor an」「wa an」の意味範疇について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21: 87-106.
2020 「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」『北方言語研究』10: 203-218.

（ま・ちょうじょう／北海道大学文学研究院）

17 世紀蝦夷地に漂着した朝鮮人関連記録『漂舟録』と『李志恒漂海録』にみえる地名「石将浦」について

シン　ウォンジ

1696 年蝦夷地に 8 人の朝鮮人が漂着した。そのうち李志恒が述べた漂流の事情や帰国までの経験は、『漂流録』と『李志恒漂海録』として残されている。両記録は、礼文島に漂着して松前に至るまでの地名を漢字やハングルで記録している等、17 世紀の北海道に関する貴重な史料である。本発表では、両記録にみえる「石将浦」という地名について、当時の地理認識及び発音の類似性に基づいて、熊石である可能性について考察した。
【本号「研究ノート」として掲載】

（しん・うぉんじ／国立アイヌ民族博物館）

学際的研究活動における知識の創造過程

―北海道大学人間知×脳×AI 研究教育センターにおけるフィールドワークから―

池 原　優 斗

1. はじめに

本発表では、調査概要および本発表で調査の中で生まれた概念である「知識のアフォーダンス」(AK)の概要、方法論について述べた後、調査結果を報告する。最後に本研究の文化人類学における位置づけを考察する。

2. 調査概要・「知識のアフォーダンス」・方法論について

本研究は、哲学等の人文社会科学、神経科学、AI を中心に学際的・文理融合的な教育・研究が行われている、北海道大学人間知・脳・AI 研究教育センター（CHAIN）をフィールドとしている。本発表は 2022 年 4 月から 8 月までの期間の調査を基にしている。

本発表は AK という概念がフィールドの中で徐々に形作られていく経過を記述・分析するものである。学際的研究における知識の創造過程において、他分野の新しい知識を聞いたときに、それが自分の考えている問題に対して「ぴったりと当てはまる感じ」を感じることがある。AK は、それをジェームス・ギブソンが提唱した概念であるアフォーダンスによって表すことができるのではないか、という発想に基づくものである。AK を用いて考える場合、他分野の知識は、個体に対して、自分野の問題にぴったりと当てはまるとひらめくことを、アフォードするのである。

本調査は、調査者がフィールドの中で行う理論的考察とフィールドで得られたデータを往還し、徐々に AK という言説がはっきりとしたものに形作られてゆく過程を含んでいる。調査者自身による理論的考察から生まれた概念である AK のフィールドとの関わりを

見ていく方法は、幾分トップダウン的要素が強くなる。しかし、CHAIN に身を置きながらの考察の最中に起こるフィールドにおけるコミュニケーションと偶然性が強く影響するものであり、現場で起きることの重要性も高いものである。

3. 調査結果

CHAIN では神経科学の理論である自由エネルギー原理について、情報科学や哲学が専門の人々も重要な概念として扱っており、調査者は、他分野の概念を自らの関心に取り入れることに関心を持った。調査者は直観的に、他分野の概念を自分野の概念に適用することがアフォードされることがあり、そうしたことがきっかけとなって、他分野の概念を研究者が取り入れるようになるのではないかと考えた。

調査者は 6 月に CHAIN のランチセミナーで発表した際、AK のアイデアを発表した。この発表には、予想外に CHAIN のメンバーから面白いという反応があった。これはトップダウン的に検討中の概念を投げかけたところ、ボトムアップ的に相手が共感を示した構図と言える。また、このやりとりにはフィールドの人々が新しいアイデアを聞いて、自らの感じていた他分野の知識が「ぴったりと当てはまる感じ」が説明できるのではないかと「アフォードされた」瞬間が含まれていると言える。一方で、面白いという反応をしたメンバーの一人から、物理的ではない抽象的な理論に関してアフォーダンスと言えるのかというフィードバックもあった。このことから、調査者はアフォーダンスでの説明が妥当かはよく検討しなければならないと考えるようになった。

2022 年 8 月に科研費基盤 A のプロジェクトである「意識変容の現象学──哲学・数学・神経科学・ロボティクスによる学際的アプローチ」の報告会が開催された。その報告の中でメンタル・アフォーダンス仮説（McClelland 2020）が取り上げられていた。これは、注意や想像といった精神的行為に対してもアフォーダンスを適用できるというもので、これを応用すれば AK を説明できるのではないかと調査者は考えた。これは、フィールドで行われた別の研究から、偶然 AK についてのヒントがやってきた出来事と言える。

本調査では、A、B、C の 3 人に対して、AK を実際に感じることはあるか聞き取り調査も行った。この質問はバイアスがかかると思われるかもしれないが、A、B はランチセミナーの際に AK に関し肯定的な反応を示しており、肯定的に思った理由や実体験を聞く形となるため、大きな影響はないと考えられる。聞き取りにおいて、A、B は AK について実際にそう思える体験をしていて、それがどのような知識であるかを説明した。一方で、C は AK について、自らの経験と照らし合わせたときに「しっくりくる」発想ではない様子だった。この聞き取りからは、アフォーダンスという概念が身近である集団のメンバーの一部が、そう形容できる感覚を経験しているということが示されたと言える。

4. 本研究の文化人類学における位置づけ

最後に、本研究の文化人類学における位置づけを述べる。相原（2017: 3）は存在論的転回における西洋的存在論を相対化するための方法として、「フィールドの人々の思考・概念をもって、新しい概念を再構成し、人類学という学問の内部で新しい概念を創造すること」である概念創造を挙げている。相原はフィールドの人々の思考に即し他者によって可能となる概念の変容を「概念の他律的変容」（相原 2017: 12-3）とし、存在論的転回の

核心となる方法と論じている。本研究は、アフォーダンスという CHAIN でも議論されている概念、すなわちフィールドの持つ言葉と思考を用いた、AK をめぐる他律的変容のエスノグラフィーとして位置づけられる。また、本研究はオートエスノグラフィーでもあり、それも特徴と言えよう。

5. おわりに

本発表では、AK が、フィールドワークのなかで徐々に確からしいものとして形作られてきた過程を報告した。また、本研究は概念の他律的変容に特徴付けられる存在論的転回の文脈上に位置づけられることを述べた。

引用文献

相原健志
2017 「人類学の存在論的転回における概念創造という方法の条件と問題―創造から他律的変容へ」『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション』49: 1-15.
McClelland T.
2020 The mental affordance hypothesis. *Mind* 129(514): 401-427.

（いけはら・ゆうと／北海道大学大学院文学院）

北海道の風流系民俗芸能
―四ヶ散米行列の伝承を事例に―

蟬塚　咲衣

1. 研究の背景と目的

四ヶ散米行列は、松前神楽の四ヶ散米舞から派生し、行列化した民俗芸能であり（常磐井 1987: 291）、祭礼行列において神輿などを先導し、進む道を祓い清める役割を担う（福島町史編集室 1997: 1385）。地域により、四箇散米行列、四ヶ散米舞行列などの表記が見られるが、本研究では四ヶ散米行列が最も早く行われた地域である、福島町と知内町の表記に統一し、四ヶ散米行列とする。

四ヶ散米行列を取り上げる理由は、①国指定の重要無形民俗文化財である松前神楽から派生し、行列（風流）化され、今もなお日本海側 8 地域で伝承されている、②地域振興の核になる可能性を秘めている、③伝承過程や採物（神事・芸能において、神官や舞人が手に取り持つ道具）について体系的に扱われた先行研究が見られず、取り上げられている場合でも、伝承元である福島町との比較という視点で述べられている、④本格的な研究や展示の対象とされてこなかったからである。したがって、四ヶ散米行列に関する全てを体系的・総合的に比較したいと考え、以下の 3 点を目的とした。1 点目は、四ヶ散米行列が 2019 年時点で伝承されている 8 地域について、伝播と定着の過程を明らかにする。また、実施機会、神職の人数、担い手の人数、他地域同士の交流状況などを比較する。2 点目は、四ヶ散米行列は、採物の種類や並び順が特徴的な芸能であることから、8 地域の採

物の比較を行う。3 点目は、四ヶ散米行列は民俗芸能の中で、華やかで人目を引く「風流」に分類されることから、風流系民俗芸能の持つ力を再検討する。

2. 研究の方法

2019 年から、四ヶ散米行列伝承地の神社、教育委員会、博物館への取材、実施状況の視察、聞き取り調査を行った。また、松前神楽の 4 保存会（小樽ブロック保存会、松前ブロック連合保存会、函館連合保存会、福島町松前神楽保存会）に取材を行った。2021～2022 年は、四ヶ散米行列伝承地の博物館に対し、アンケート調査を実施した。

3. 各伝承地における実施状況

四ヶ散米行列が最初に始められたのは、現福島町の福島大神宮と現知内町の雷公神社で、松前藩政時代の 17 世紀末とされている。その後、神職と福島町出身者により、1907 年前後には現小平町鬼鹿厳島神社で始まった。つぎに、福島大神宮宮司が、現利尻町北見冨士神社の宮司に就任し、1911 年頃に利尻町で始められた。さらに、北見冨士神社宮司が現利尻町の仙法志神社宮司を兼務し、島内の別地区に伝承された。また、北見冨士神社宮司の孫が、現礼文町厳島神社宮司に就任し、1935 年頃に礼文町で導入された。そして、現利尻町で四ヶ散米行列を指導していた神職のご子息が、奥尻町宮司に就任し、1962 年頃に奥尻町で始まった。つづいて、小樽市潮見ヶ岡神社宮司が、1988 年頃に奥尻町澳津神社の祭礼を手伝ったことを契機に、1990 年頃から小樽市で導入された。また、奥尻町宮司のご令姉が、黒松内町大鳥神社宮司と結婚されたことが縁で、大鳥神社の祭礼を手伝うようになり、1991 年頃から黒松内町で始まった。

町指定の文化財指定となっているのは、福島町と礼文町の 2 地域のみで、神社が独自に主催する地域が半数を占める。実施機会は基本的に神社の例大祭時で、例外として、かつては地域振興を目的としたイベントでも行われた。担い手は、福島町では大人が中心だが、その他の地域では中学生以下の子どもが担い、人数は、10～20 人程度である。他地域同士の交流は、文化財登録がされている礼文町と福島町間の事例と、文化財未登録で保存会もない奥尻町と寿都町間の事例が見られた。

8 地域の採物を比較すると、先頭が杵で、次が薙刀という地域が 8 地域中 6 地域を占める。利尻町と奥尻町は先頭が鈴および鈴剣で、次が剣と続いていることから、利尻町の方式が奥尻に伝えられたと考えられる。小平町では、小学生が持つには重いという理由で杵が用いられなくなり、小樽市では開始当初、奥尻町の並び順を参考にしていたが、子どもたちにとって薙刀が重く、弓は舞う際に危ないことなどを理由に、剣に統一された。

4. 結論

本研究の結論は、以下の 3 点である。1 点目の四ヶ散米行列の伝承過程については、神職個人の交友関係やネットワークによって伝承されている。また、松前神楽の伝承地周辺に分布しており、松前神楽との関わりの深さがうかがえる。2 点目の採物の比較について、調査前は「伝承元の並び順を正確に再現している」との仮説を立てたが、予想に反し、同じ並び順の地域は 1 つもなかった。伝承元の並び順を重視するだけでなく、伝承過程で各地域の独自性やユニークさが生まれ、担い手に応じた簡略化がされていた。3 点目

の風流系民俗芸能について、四ヶ散米行列は 17 世紀末に誕生し、1990 年代においても新たな地域で導入され、今もなお地域住民に親しまれている。学芸員や研究者は、松前神楽など文化財登録されているものに多くの関心を寄せる傾向があるが、四ヶ散米行列は未登録でも、地元の住民が楽しんで携わっている様子が見られた。風流の特徴である華やかさで場を盛り上げ、道端で見物する人々を楽しませ、参加意欲をかき立てる力を有する。

コロナ禍のため、四ヶ散米行列を 3 年連続で中止した地域が多くある。今後の課題として、充分に比較できなかった、所作、衣装、演奏（楽器）、練習（準備）の実態を現地調査する。また、博物館学芸員として、伝承地の博物館や地域住民と連携し、展示や講座などを開催したい。継承の危機に直面している地域や、保存会のない地域で、関係者間のネットワークを構築し、対応策を協議するなど、各地域の事例の共有を図りたい。

引用文献

常磐井武季
1987　『正統松前神楽』福島大神宮、福島.
福島町史編集室
1997　『福島町史 第三巻 通説編下巻』福島町、福島.
北海道教育委員会
「北海道の民俗芸能一覧（「北海道民俗芸能緊急調査」（H7～9）のフォローアップ集計）平成 30 年 11 月 21 日現在」（https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/4/7/4/_/2018hokkaidonominzokugeinou.pdf、2022 年 10 月 16 日閲覧）

（せみづか・さきえ／小樽市総合博物館学芸員）